

平成 27 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	27K18	氏名	大山 章博
研究主題 —副主題—	人と人をつなぐ長期宿泊体験活動 —協調して生活することの大切さが実感できる体験活動の工夫と教師の関わり—		
所属校	府中市立新町小学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>1 研究の背景 近年、少子化や情報化、地域における人間関係の希薄化などに伴い、子供の育ちにおいて自制心や耐性、規範意識が十分に育っておらず、協調性に欠けている面があるなどの指摘がされている。その背景には、自分の思いをうまく相手に伝えたり、自分の感情をコントロールしたり、相手とコミュニケーションをとったりという人間関係づくりに必要なスキルの習得に課題があると考えられる。このような状況を改善するために、2013 年 1 月の中央教育審議会の答申において、長期宿泊体験を含む体験活動の更なる推進と充実を図ることの重要性が改めて示された。</p> <p>これまでも各学校においては、体験活動を教育課程に組み入れるだけでなく、長期宿泊体験活動を中心とした総合的な学習の時間のカリキュラムを開発するなど、様々な努力を重ねてきた。その成果については明らかなどころであるが、次期学習指導要領の改訂を見据え、長期集団宿泊活動の成果と課題について、現行の学習指導要領の目的や先進地域の取組の視点などから検討し、今後の取組の方向性を考える時期に来ているように思われる。また、これまでの宿泊体験活動における研究では、活動の計画作成・実施の主体者である教師に焦点を当て、子供たちの協調性を育むための支援や指導の在り方について明らかにした研究は少ないのが現状である。</p> <p>2 研究の目的 他者と協調した生活を送る上で必要な諸条件である、限られた時間・空間・人間を意図的かつ計画的に整えることのできる長期宿泊体験活動は、子供たちに道徳性や社会性を身に付けさせるためにも、重要な役割を負っている。</p> <p>そこで、先行研究や帯同観察を通して、人と人をつなぐ長期集団宿泊活動の在り方について明らかにするとともに、望ましい教師の指導・支援及び学生を中心とした指導員や保護者との連携・協力をどのように図っていくかについて考察し、今後の長期集団宿泊活動を計画・実施する際の一助とすることを本研究の目的とする。</p>
II 研究の方法	<p>1 基礎研究…先行研究並びに文献研究 (1)長期宿泊体験活動における教育的意義と成果について (2)先進地域の取組の成果について (3)基礎研究から得た知見</p> <p>2 事前調査…所属校第 5 学年に対する質問紙調査 (1)子供：長期集団宿泊活動に対する不安と期待について (2)保護者：長期集団宿泊活動に対する不安と身に付けてほしい力について</p> <p>3 帯同観察による調査研究 (1)子供たちが出合った「3 日目の壁」※の実例について ※人間関係の問題や生理的な欲求（食べる、寝る、排泄する等）を我慢できるのは 2 泊程度までで、3 泊目頃から生活環境の違いや一定の人間関係の摩擦に耐えられなくなり、時には友達と衝突したり、ホームシックにかかったりすることが多いと言われる。 (2)「3 日目の壁」を乗り越えるための教師の支援と指導の実際について</p> <p>4 子供たちが生み出した協調した生活の実例について (1)「しおり」に見られる子供たちの主体的な取組 (2)帯同観察から得られた子供たちの協調的な生活</p> <p>5 引率者と指導員（教員志望の大学生）との連携について (1)指導員の業務について (2)指導員と子供たちとの関係</p> <p>6 事後調査…所属校第 5 学年に対する質問紙調査 (1)子供：長期集団宿泊活動前後での自己の変容について (2)保護者：長期集団宿泊活動後の子供の変容について</p>

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>本研究では、子供たち同士の関係性に問題が生じたり、トラブルを子供たちだけで解決することができなかつたりした際に教師が行った支援・指導について、以下のような共通性を見出すことができた。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 子供の抱えている問題や不安が何かを丁寧に聞き取り、その原因を子供自身で見付けて取り除いていくことを促すようにしている。 ② 集団の中の一人であることを意識させつつも、一人の存在が集団の中で大切であることに気付かせている。 ③ 他者の気持ちにも気付かせ、言葉の伝え方を考えたり、時には自己を抑制する心の強さも大切ということと一緒に考えたりしている。 <p>上記の教師の支援や指導を受けながらも子供たちは、期間の半ば辺りには残りの日数での生活に対して不安を覚えたり、このままでよいのか疑問に思ったりして、どうすればこの局面を乗り切れるかをグループで考え、話し合わなければならない状況になっていった。また、他のメンバーの話をじっくり聞くことで、自分も同じ気持ちであることを伝え、他者意識を減少させていき、子供たちがお互いに分かろう、分かってもらおうとしながら、協調して生活をしていこうと努力をしていく姿が見られた。</p> <p>その一方、課題としては、以下の点が挙げられる。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 長期宿泊体験活動の意義を子供たちの成長につながる視点から説明し、保護者からの理解と協力を得る必要がある。 ② 長期間の宿泊となることで、不安や心配を抱いている保護者への説明・対応（健康・安全面の配慮、緊急時の連絡方法、実施期間中の情報提供の方法など）については、数回に分けた段階的な説明が必要であると考えられる。 ③ 長期集団宿泊活動で人間関係の醸成を図るためにも、早い段階から集団づくりを意識した学年経営や学級経営が必要である。 ④ 子供への意識調査結果から、多くの項目において事後から1ヶ月後にかけて意識の低下が見られた。このことから、意識や行動を継続させていくためにも、子供自身が体験活動で学んだことを振り返る場面を日々の生活場面に設定する必要がある。 ⑤ 宿泊を伴う活動に子供一人一人のテーマを絞った体験学習を仕組み、事前・事後指導を充実させ、課題の追究を試みさせていく必要がある。
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>今回の調査では、長期宿泊体験活動における教師の支援や指導の在り方について子供たちの実態とともに明らかにすると同時に、指導員や保護者が抱えている不安や悩みについても把握することができた。これまで明らかにされていなかった面に光を当てることができた意味は大きい。また、帯同観察を通して長期宿泊体験活動そのものについての有意性を確認することもできた。</p> <p>子供たちの事後調査の結果からは体験したことに対して肯定的な表現が多く、教育課程に位置付けられた特別活動のねらいは達成していると考えられる。これまでの研究においても、体験活動そのものに対する評価は高いことを考慮すると、今後も体験を通した学びの重要性は高まっていくであろう。しかし、子供たちが寝食を共にすることで集団の凝集力や人間関係、行動様式に改善が見られた一方で、元々の人間関係が変化してしまったり、軋轢を生んでしまったりすることもあり、事後の学級経営に留意していく必要があることも明らかになった。</p> <p>学力とは違い、体験活動を評価することは難しく、今回の研究では子供たちの変化と環境を捉えるケーススタディとなった。今後は、どのようなきっかけをつくれればよりより変化になるのかについて、さらに、質的並びに量的調査やアクションリサーチによって解明していく必要があると考えられる。次年度以降、所属校における宿泊体験活動の改善に努めていきたい。</p>